

# ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子図書館 編集：松居友

62号・2017年12月



来年度の2018年の日本公演

ミンダナオ子ども図書館では、今年の春に、

2ヶ月にわたり、日本で、先住民、イスラム教徒、クリスチャンの、踊りと歌の公演をしました。

幼稚園から小中学校、高校大学にいたる学校で、日本の若い世代と交流し、

国境を越えた友情を体験した、若者や子供たち、お寺の境内や教会やホールで、中高年の方々と、想像以上の感動的な交流が生まれました。

日本の皆様方が、宗教や部族が違っていても、兄弟姉妹、家族となって、明るく歌い踊る、

MCLの奨学生たちのように、

驚きと感動を示され、時には涙を流しながら、

「目の輝きや笑顔に、生きる力が感じられる。」

「自分の子供時代を思い出すわ。」などと、

おっしゃるのを聞いて、この活動は、

日本の青少年や、中高年の方々のためにも、

MCLの奨学生たちのためにも、

続けていこうという、強い思いになりました。

現地在夏休みの4月10日〜6月10日に、

毎年MCLの奨学生たちが、日本各地を巡って、

ミンダナオの伝統的な踊りや歌を披露します。

ビザの取得が容易な高学年ですが、子どもも好き。

パスポートやビザの準備を進めています。

ミンダナオでは踊りや唄は、村人たちが

先祖の霊や、妖精たちといっしょに楽しむもの。

ですから、彼らの交流も、

ステージから降りてからが本番、

本当の友情と愛の、楽しい交流の始まりです！

希望の方は、メールで松居友までご連絡下さい。

日本の若者や子どもたちが、MCLにきて、ミンダナオの子ども図書館の子供たちに囲まれて、いっしょに歌ったり踊ったり遊んだりすると、必ずといって良いほどに、帰りがけに泣き出す。中高年の方々や、テレビ取材に来たパクンヤティレクターも泣かれた。聞くとき次第にわかってきたのが、日本にいるときの孤独感だった。

そのこともあり、日本の人々、特に未来を担う青少年の事を放っておけなくなり、また現地スタッフの自立と、将来MCLを担う妻子やスタッフに日本語を学ばせるためにも、15年ぶりに日本に妻子と滞在しはじめた。しかし、驚いたのが、ここ15年の日本社会の変貌ぶりだ。

青少年の引きこもりや自殺率は、想像以上で、事故死も含むと世界最高のレベルだという。一方のフィリピンは、アジアでも最低レベルだ。ミンダナオでは、知らない人同士でも、目と目があえば挨拶をするけど、日本では、道ゆく人々も目と目を合わせず、厳しく前を見つめて歩いて行く。電車のなかでも、スマホをするか、悲しげにうつむいたまま。

だからといって、日本がどうしようもないわけではなく、ゆとり世代の若者たちは、結婚して子どもが生まれて

も、父親が赤ちゃんを胸に抱いて家族で散歩をしていたり、自然の美しさや、武器を持たない安全な社会といった、他国にはない良さがある。アジアや世界の人々が、観光で日本を訪れたくなる気持ちは良くわかる。

これからの日本の未来は、戦争ではなく平和を作る国として、アジアのなかで、世界の中で、心の壁をとりさ

て、とりわけ近隣の国々と、友情と愛をもってつきあって行くことだろう。

日本経済も世界も厳しい状況が続くだろうが、それでもミンダナオの先住民族の暮らしぶりに比べると雲泥の差がある。ただし、心の貧困は、ひょっとしたらミンダナオの貧しい人々の方が豊かで、日本の人々の方が、貧しい状況に追い込まれているかもしれない。

そんな日本とミンダナオを見ながら、ミンダナオ子ども図書館では、両方の国の国境をとりはらい、とりわけ両国の青少年を視野に入れて、交流できる活動を推進していくことに決めた。その一つが、サンタマリアの海の宿舎で、来年の6月には開所式をする。そして、もう一つが、今年の春から始めた、若者たちによる踊りと唄の日本公演だ。

互いに分かち合い助け合うことこそが、大切だという思いになって。

## 2018年の日本公演

来年も、4月～5月に、MCLの奨学生たちが日本各地を回って、ミンダナオの伝統的な踊りや歌を披露することになりました。来日するメンバーが選ばれ、パスポートやビザの準備を進めています。

また、10月から毎週、授業のない土日にメンバーが集まり、歌や踊りの練習が始まりました。来日予定の奨学生とスタッフ10人を紹介します。

### 奨学生

Jamila M. Sakib (女性) 15歳

マギンダナオ族

アッサラム・アライクム!

私の名前はジャマイカ。マノンゴル高校の2年生で、イスラム教を信仰しています。出身はピキットのブロードで、小学校を地元で卒業してから、MCLの寮に移りました。実家から地元の高校が遠いからです。



私は、2013年に母をシリアの戦争で亡くしました。出稼ぎで家政婦として働いていて、戦闘に巻き込まれたそうです。母は、私が小学校に上がる前にシリアに行ってしまったので、もう顔も覚えていません。でも、2年前に父が再婚し、私も新しいお母さんが大好きなので、あまり寂しくありません。家族と離れて暮らして家が恋しくなることもありませんが、MCLでの生活も、とっても楽しんでいます。ハウスペアレントさんがすごくいい人だし、いつも友達が冗談を言って笑わせてくれるから。勉強を続けて、将来は看護師か先生になりたいです。

8月に、MCLのみんなでミス&ミスターコンテストをしたときは、私をミスMCLに選んでもらえました。その時に、私たちマギンダナオの伝統的な衣装で、踊りも披露しました。今回、日本でも私たちのダンスを見てもらえるのがとてもうれしいです。マノボやピサヤのダンスを練習するのもワクワク



講演会、報告会、家庭集會に、松居友が謝礼に関係なくうかがいます。

サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。

講演や家庭集會の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。

メールや電話でもお申し込みください。メール: [mcltomo@yahoo.co.jp](mailto:mcltomo@yahoo.co.jp)

電話番号: 080-4423-2998 (日本および現地転送・松居友)



Richard B. Rufang (男性) 20歳  
マノボ族

僕の名前は、リチャード。キダパワン高校の6年生で、キダパワンの町にあるMCLの寮に寄宿しています。出身はアラカンのラナオコラン村のキロ

クするし、他の民族の友達に、私たちのダンスを教えられるのもうれしい。MCL歌では、「サンキュー」が一番好きです。友達に、友情や、自分と一緒にいてくれたこと、助けてくれたことを感謝する歌です。日本でも、たくさん友達をつくりたいな。それから、サクラや雪、大きなビルやきれいなお家を見たいです。日本のふりかけとチョコレートと、鶏肉も食べてみたいです。

ハスで、信仰はプロテスタントです。小学5年生の時に、MCLの奨学生になりました。同じキロハス出身のピティボーイさんが、高校や大学を卒業したのを見て、僕も勉強を続けたいと思っただけです。もし、僕が高校を卒業できれば、キロハスで2番目の高校卒業生です。来年の4月に高校を卒業したら、南ミンダナオ大学キダパワン校で、電気工学を学びたいです。将来は、電気技師になるのが夢です。

僕は6人兄弟の長男なので、就職して、弟や妹も、高校や大学で学ばせてあげたいです。両親は、キロハスでお米とバナナとゴムを育てています。お米は山で育てる陸稲です。それらを売って現金を稼ぎますが、安く買われるので、僕たち兄弟の学費には足りません。うちは竹とニッパ椰子でできた家に住んでいるし、ご飯も時々3食食べられません。でも、僕もピティさんのように、キロハスの子どもたちが勉強を続けたくなる様な見本になりたいです。

日本に行くメンバーに選ばれて、思わず飛び上がってしまっただけでした。日本では、僕たちマノボの文化や、僕たちの暮らしを紹介したいし、日本の子どもたちの生活の様子も知りたいです。お互い、いい友達に



Honey Lee A. Galibid (女性)  
19歳 ビサヤ族

なれたらいいな、と思います。新しい体験をたくさんできると期待しています。日本に招待して下さる皆様や、公演を手伝って下さる皆様、MCLを支えて下さっている皆様に、感謝を伝えたいです。

ハイ！私はハニーで、マノングル高校6年生です。来年の4月に卒業予定です。今は卒論を制作中です。とても難しくって頭が痛くなっちゃうけど、勉強は楽しいです。高校を卒業したら、南ミンダナオ大学キダパワン校で経営学を学びたいです。将来は会社で働きたいの。私は8人兄弟の4番目で、弟や妹たちにも勉強を続けてほしいから。

私の父は、私が13歳の時に銃で殺されました。私の故郷はマキララのマロンゴで、父はバナナを育てていたけど、近所の人に売ったバナナのお金を返してもらおうと言ったら、撃たれてしまったんです。その日は、私がMCLの奨学生に採用された日の夕方だったから、とてもよく覚えてます。私の兄と、2人の弟、1人の妹もMCLの奨学生で、私が小学6年生のときから、MCLの敷地の中にある家に、母と兄弟で暮らしています。MCLにいるスタッフや奨学生たちはまるで家族のようで、とても楽しいです。父が死んで、母も仕事がなく、私も母と上手いかなんかともあったけど、夢をあきらめていません。辛い経験があっても強いられるし、笑っています。

日本では、特に私たちの伝統的なダンスを見てもらいたいです。そして、私も日本の伝統に触れたいです。着物を着たり、温泉にも挑戦してみたい。服を全部脱ぐんですよ！食べ物も薄味だつて聞いたけど、フィリピンにないものを食べてみたいです。トイレにも、バケツとひしゃくがなく、ボタンを押して水を流すそうです。水の流し方が分からなかったら、どうしよう！不安もたくさんあるけれど、新しい体験や、新しい友達に出会えることを、楽しみにしています。



Admin M. Pakingan (男性) 19歳  
マギンダナオ族

僕はアズミンといいます。イスラム自治区のマギンダナオ州パガロランガンのカルボガン出身で、イスラム教を信仰しています。パロンギス高校の4年生です。好きな科目はフィリピン語で、苦手なのは数学。高校を卒業したら、南ミンダナオ大学カバカン校の教育学部で学び、将来は小学校の先生になりたいです。僕は10人兄弟の上から4番目で、小さな弟、妹がたくさんいます。子どもたちが好きだし、一緒に遊ぶのも得意なんです。

父は、トウモロコシを育てて売って、収入を得ています。母は、トウモロコシを手伝ったり、小さい弟、妹の子守りや、家事をしています。兄弟が多いので、家族全員が毎日お腹いっぱい食べられるだけの食料を探すだけでも大変です。



Menrose B. Lardas (女性) 19歳  
マノボ族

日本は平和な国だと聴きました。僕たちの故郷はときどき紛争があります。避難生活はつらいし、その間学校も行けなから、平和な環境で勉強できる日本の高校生がうらやましいです。同じ世代の友達と、平和の大切さについて分かち合えたら、と思っています。

日本の皆さん、こんにちは！私はメントローズといいます。信仰は、プロテスタントです。ノースバレー・アカデミー大学の1回生で、エックス線技術を学んでいます。大学での勉強は、難しいけど楽しいです。大学を卒業したら、エックス線技師として病院で働きたいです。

私はマグペットのボンゴラノン村の出身です。小学3年生の時、学校をMCL

が訪れ、先生が私を奨学生に推薦してくれました。私の兄弟が多かった(9人兄弟の上から6番目です)のと、授業に積極的に参加していたからです。

両親は、山でバナナとハヤトウリを育てて収入を得ています。家では、1日3食ご飯をなんとか食べられますが、今は、MCLの寮に住んでいます。ルームメイトたちと過ごす時間は、とても楽しいです。他の民族の奨学生とも、お互いの夢を話したり、協力してご飯を作ります。友情の大切さを学びました。

日本に行くメンバーに選ばれて、とてもとてもうれしいです。まさか、自分が選ばれると思っていませんでした。日本の皆さんに、私たちの文化や伝統を伝えられる、神さまが与えてくださった運命を感じました。日本でお会いできるのを、とても楽しみにしています。私たちの歌やダンスで、皆さんをハッピーな気持ちにできたらな、と思います。

Ricky L. Munday (男性) 26歳  
マノボ族

こんにちは！私の名前は、リッキーといいます。出身は、アンティパスのマグサイサイ村のプロック7で、プロテストナントです。アラカンにあるドロ



ローマン科学技術大学の4回生で、来年10月に卒業予定です。農学部で勉強して、専門はプランテーションで育てる作物、例えばココナツ、ゴム、アブラ椰子、バナナップル、バナナ、コーヒ、カカオ、サトウキビについて勉強しています。将来は、農業技術者か、ドールやスミフルなどプランテーションを経営している会社で働きたいです。

MCLの奨学生で、農業を専攻する学生は珍しいです。農家出身の学生が多く、小さい頃から仕事を手伝っているの、みんなは学校の先生になったり、会社で働きたいと言います。でも、私は大学で学んだ農業の技術を故郷の貧しい農民たちに伝えて、生活が良くなる助けをしたいんです。

僕の父は、牧師でしたが15年前に病気でなくなりました。何の病気だったかは、分かりません。母はその後再婚し、私は新しい父とも母とも、それなりに上手くやっています。私は5人

**自由寄付は、一番根幹になる寄付です。**

**貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。**

**保護を必要として、MCL本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている200名ほどの奨学生の生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々。**

**機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。**

**他の方々に紹介していただければ幸いです。**



兄弟の3番目ですが、兄弟の中で自分だけが高校を卒業しました。

日本での公演では、みんなが歌うとき、私がギターを弾きます。ギターは、故郷の友達に教えてもらいました。歌うことも、踊ることも好きです。MCLの学生総会は、いつもとても楽しんです。特に6月のマノボデーは、他の民族の奨学生に自分の文化を紹介できるので、張り切ります。日本でも、たくさんの方に観ていただければいいな、と思います。

日本は発展した国だと聴いていますが、実際に訪ねるのが楽しみです。また、自分を支援して下さっている方々に、お礼を伝えたいです。

Dina Marie T. Bade (女性) 18歳  
イロロン族

私は、ダイナマリ。イロロンゴ族で、モルモン教徒です。出身は、プレジデント・ロハスのトゥアエル村のプ



ロック6です。ノースバレー・アカデミー大学の情報技術科3回生で、キダパワンにあるMCLの寮に住んでいます。コンピューターのプログラミンなど、パソコンを長く使って勉強するので、目が痛くなることもあります。学校はとても楽しいです。

大学を卒業したら、オフィスワークに就くのが夢です。私の両親は離婚しています。父はゼネラル・サントスで働いていて、今でも時々、お金を送って生活を助けてくれます。母は、マニラに出稼ぎに行き、子守りをしています。なかなかミンダナオに帰ってくるのでできないので、さみしいです。私が故郷の家に帰る時は、祖母のところに戻ります。家族がバラバラになってしまいました。でも私は幸せで、毎日楽しんで生活しています。友達やクラスメイトが、いつも私を幸せな気持ちにしてくれるからです。MCLの寮で、違う民族の子たちと過ごすのも楽しいです。日本の皆さんも、いつも

幸せでいて下さいね。

4月に日本の公演に参加できることになって、とても興奮しています。サクラを見てみたいんです。日本では、私たちの伝統的なダンスをぜひ見て下さい。一生懸命、練習しています。

Alparapy A. Drai (男性) 19歳  
マギンダナオ族

僕の名前はアルパパイ。バガロガン州のブリオク村サパカンの出身でイスラム教徒です。ピキット高校の1年生です。学校では、たくさん知識を得られるので、とても楽しんで勉強しています。来年高考を卒業したら、南ミンダナオ大学カバカン校の教育学部で学んで、将来は高校の先生になりたいです。子どもたちに麻薬を使わないよう怖さを教えたいんです。僕たち

のところでは、隠れてマリファナを育てて売っている人がいます。葉っぱをタバコのように吸うのですが、高校生でも買えるほど安いです。子どもたちの将来のために、教育はとても大切だと思います。



だと思っています。

それに、先生になれば家族を経済的に楽にできます。僕の父は、川で川で魚を採ることを生業としていますが、現金収入は少なく、僕たちの学費を払うことが難しいです。母は、父を手伝ったり、家で洗濯や炊事をしています。僕は5人兄弟の上から3番目です。僕が小学4年生の時、MCLがサパカンを訪ねて、調査をし、奨学生に採用されました。

僕は、ダンスや歌があまり得意ではありませんが、日本で僕らの文化を紹介できる機会に恵まれ、一生懸命練習しています。学校の違うマノボやキリスト教徒のメンバーとも親しくなり、練習中はいつも笑っています。

日本では、人々が一体どんな暮らしをしているのか、興味があります。僕らはイスラム教徒で、「豚肉を食べてはいけない」など、コーランに従って生活していますが、日本にはどのような風習があるのか、見てみたいです。



詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」

<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>

サイトから、Paypalを使った、ネットバンキングも可能になりました。

## スタッフ

Janisa W. Pandian (女性) 23歳

マギンダナオ族

私はジャニサで、イスラム教徒です。この6月からMCLのスタッフとして、医療支援を担当しています。本当は前回の日本公演に参加する予定だったのですが、パスポートの申請に時間がかかってしまって、間に合わなかったのです。

大学では、コンピューターと電気工学を学びました。今の仕事は大学の専攻とは違いますが、ずっとMCLで働きたかったのです。とても楽しんでいきます。病气やけがで困っている奨学生たちの手助けをできることは大きな喜びです。それに、マラウイの戦闘から避難している人々の支援にイリガンに行くこともできました。避難所でムスリムやマノボ、ビサヤの歌を歌っているとき、泣いているマラウイの人がいます。



した。スタッフとして、人々を助ける仕事に関われるようになったのがうれしいです。それに、お給料で家族を助けることもできるようになりました。日本では、特に子どもたちと幸せな気持ちをお分かち合いたいです。毎日忙しすぎたり、深刻に悩んでいる子どもたちを、少しでも笑顔にできたら、と思っています。10月に入ってから、毎週土日に歌やダンスを練習しています。日本のたくさんの人々に観ていただけたらうれしいです。そして、支援のお礼を直接会って言いたいです。私の兄もMCLの奨学生で大学を卒業できました。妹は、今、大学3年生です。私たちがからの、大きな大きなありがとうを伝えたいです。

Pitty Boy G. Laray (男性) 25歳

マノボ族

こんにちは。私の名前は、ピティボーイです。MCLのスタッフとして会計で働き始めて3年目になります。信仰は、マノボ族の神さま「マナマ」を信じ、伝統的なお祈りをします。出身はアラカンのラナオコラン村のキロハスという集落です。10人兄弟の2番目に生まれました。父も母も元気で、山で働いています。

私は、小学1〜2年生はバコバコ小学校、その後ミオカン小学校で学びました。昔はバコバコは小学2年生までしかなかったのです。学校はとても遠く、片道3時間かけて歩いて通っていました。高校はラナオコランで、寄宿するお金がなかったので、空き家に友達5人で住んで通学していたときもあります。小学3年生から高校を卒業するまで、イタリアのファウスト神父の奨学生で、学校で使う文具や宿題に必要な模造紙などを買うのを支援してもらいました。

高校を卒業後、奨学金がなくなり、1年間実家でバナナやカカオ、コーヒーなどをつくるのを手伝っていました。MCLの奨学金のことを知り、応募しに訪ね、採用してもらえました。奨学金でキダパワンのセントラルミンダナオ大学を卒業しました。大学では、経営学を学びました。私はキロハスで、初めて高校、大学を卒業した子どもでした。今では、バコバコ小学校の卒業



式の来賓に呼ばれ、スピーチをします。私がMCLのスタッフになったのは、大学卒業後帰っても仕事がなく、キダパワンに残りたかったからです。それに、同じマノボ族の奨学生たちに、教育の大切さを伝えたいと思っています。私は会計担当なので、ハウスペアレントやソーシヤルワーカー、スカラシップ部のスタッフのように、子どもたちの悩みに直接関わることはありませんが、お小遣いの前借りなど、お金に関して彼らの相談にのっています。

働き始めたときは、覚えることが多く大変でしたが、今ではずいぶん慣れて楽しんでいきますし、自分の仕事が好きです。MCLに来る前は、ムスリムやクリスチャンの民族のネガティブな噂を聴くこともあったけど、実際に共々に暮らして、どの民族も同じだと気が付きました。寮にいたときは、彼らと一緒に過ごすことを楽しみました。日本でも、信仰や文化の違い私たちが一つになって歌やダンスを披露するのを見ていただけたらうれしいです。

日本の皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」

<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>

サイトから、Paypalを使った、ネットバンキングも可能になりました。

# この子たちの支援者になっていただけませんか！

**Jona J. Castillo 15歳 イロンゴ族 バサック高校4年生(6年制)**

マアヨン ハボン！私の名前はジョナ。2002年1月26日生まれの15歳です。10人兄弟で、9番目に生まれました。コタバト州アンティパスのカムタン村のゴマイという集落で暮らしています。イロンゴ族で、カトリックを信仰しています。

私が9歳の時、お父さんが何者かに殺されてしまいました。誰に殺されてしまったのか、今でも分かりません。それからは、お母さんがゴムのプランテーションで、木の幹に傷をつけて、白い樹液を集める仕事をして、私たちを育ててくれました。でも、私たちは兄弟が多いし、ゴム農園の仕事はお給料が安いので、生活はいつも苦しかったです。

私がMCLの奨学生になったのは、2012年です。お父さんがいなくても、毎日ご飯をお腹いっぱい食べられなくても、勉強を続けたかったので、奨学生になれて本当にうれしかったです。

奨学生になったばかりの頃は、MCLで暮らしていたこともありますが、やっぱりお母さんが恋しくて実家に戻り、今は家から高校に通っています。高校4年生まで勉強を続けてこられました。あと2年、シニアハイスクールで頑張って、高校6年生を卒業したいです。そして、大学の教育学部で勉強して、将来は先生になりたいです。私のように、親を亡くした子たちが勉強をあきらめないように、励ましてあげられたらな、と思います。それに、お母さんも私たちのためにずっと頑張ってくれているから、私が先生になって、お母さんを楽にしてあげるのが夢です。

宿題に使う模造紙やファイルを買うのにお金がかかって大変なこともあります。精一杯勉強して、夢を叶えたいです。



**Lister A. Caliguind 20歳 ビサヤ族 南ミンダナオ大学キダパワン校3年生**

日本の皆さん、こんにちは。僕はレスターといいます。1997年7月11日生まれで、20歳になりました。8人兄弟の、上から3番目です。ビサヤ族で、プロテスタントを信仰しています。

今は、大学に通うために、大学の近くの寮に住んでいますが、実家はMCLの敷地内であって、母と、兄弟と、姪が住んでいます。大学から家がそんなに遠くないので、ときどき週末には実家に帰ってます。

僕は、日本の公演に参加する予定のハニーのすぐ上の兄です。ハニーの話にもあるように、僕が13歳の時に、僕の父はバナナを売ったお金を返してもらおうとして、知人に銃で撃たれてしまいました。でも、僕は父親が殺される前にMCLの奨学生になっていたのだから、ここまで勉強を続けることで来ました。とても感謝しています。

大学では、自動車経営学を専攻しています。授業についていくのは大変ですが、大学生活はとても楽しいです。僕には、下にまだ5人の弟と妹がいるし、姉は夫と別れて、2歳の娘を僕たちの家に残してサウジアラビアに出稼ぎに行ってしまったし、母には仕事がありません。兄がMCLのスタッフとして、MCLの家庭菜園で働いていますが、兄も結婚して子どもができ、生活が厳しいので、早く大学を卒業して仕事に就き、家族を助けたいです。そして、弟や妹たちにも、しっかりと勉強を続けてほしいと思います。僕の下の子2人と弟2人もMCLの奨学生です。僕たちの勉強を支えて下さっている皆さまに、深くお礼申し上げます。



湯布院の、日野住職さまのお寺の境内で、連泊させていただき、九州で活動しました。子供たちにとって、一生の想い出！

寝る場所さえあれば、泊まってほしいで、自分たちでご飯を作る子供たちに、日野住職さまもピククリ！春風に吹かれているかのよう、楽しそうに子供たちの姿を見つめながらもあっという間にミンダナオの小鳥たちは、別の地域に飛んでいきました。

日野住職さま、ありがとうございます！



## 我が家はいつの間にか「子ども図書館」に

日野詞城

4月28日、仏教会の会議を終えて部屋に戻ろうとしたとき、廊下に沢山の荷物が山積みされていた。「そうか松居さんたち宅配便で荷物を送ったのか」と思い部屋に戻ると「きたわよ！荷物おいて遊びにでかけたよ」だった！

29日到着の予定であったので、1日早く来たことになる。少々たじろいだが、そんな私の気持ちとは無縁に、賑やかに子どもたちが街から帰ってきた。部屋に上がる前、「長期の滞在になるので、ここは自分のお家だと思っ自由を過ごして下さい」と、伝えて貰った。まだ貸し布団も届いてない。「どうしましょう」と友さんに聞くと、寝袋を持ってるので大丈夫だと言う。到着したばかりの初めての日本の夜、寒いよ、中でも由布院の夜は冷える。私は、妻の敦子と、寝具となりそうなのをあるだけ引っ張り出して、使うことにしようと決めた。

簡単なレクチャーのあと、子どもたちは、本堂一杯に拡がり、遊びを始めた。日本の子どもたちのように「何をして遊ぼう」ではなく、初めての日本、

はじけるような歌声が聞こえると、一緒に歌いそして踊り出す…一つのことには長くは続かず、次々と折り重なるように遊びがとびだす。椅子取りをやっている子たちもいる。ピアノを見つけて弾いても良いかと訊ねてきた子もいる。「あるものは何でも使つて良いよ」と伝え「ほっておけばいいな」と私は退散。

間もなく夕食の準備が始まった。近くのスーパーマーケットに友さんの車で買い出しに、出掛けるところから、賑やかな夕食作りが始まった。調理具は、鍋一つにフライパン一つ、それだけあればいいという。ガスコンロの使い方を教えているときは神妙な顔をして質問もあった。ご飯は、二升炊きの炊飯器。ガスに火を付けてあとは、出上がるのを待つだけと、手順を教え、



あとは音で判断するように伝えた。作業の一つ一つがうれしくって、楽しくってたまらない子どもたちの声が聞こえてくる。

1時間ほどしてお料理は完了。食べる方も自由だ。全員揃って食事をしたのは、友さんがいた何日間かだけだった。食事の決まりはなさそうである。立ったまま食べる子も、座り込んで食べる子も、腰を下ろす場所を見つけて「みつけた」という感じの子も。お皿1個にお皿一枚、お箸にスプーンを準備したが、お茶碗の上におかずを載せて、手を使い、上手におかずを巻き込むようにして食べる子もいる。食べながらも、身体はリズムを取っている。手を休めて歌い出す子も。いやはや「食べることが、こんなに楽しいことなのか」と驚かされた。

おかず代は1日千円程。質素な素材を丁寧に調理して朝夕延べ30人分を賄う。日本の食事の1人前で、30人のおかずを作る。どんな味がするのか、時々つまみ食いをしたが美味だ。とりわけ油の使い方が上手い。塩コショウに醤油、決して廃油などは出さない。作る人も食べる人も、台所に移動するとき、リズムを刻み何かを歌っている。「これがミンダナオの共同生活なのだ」と。



滞在期間中は雨が多かったため、殆ど本堂での部屋遊び。ゲームをする姿はない。ボールなどの少しの遊び道具で、遊びを作り出す。歌声の他に、一日中ピアノやギターが鳴っていた。

夜になると疲れた子たちが、布団に潜り込む。布団の中で「うるさい」と言っていることに気づいて欲しいのだろうか、気づくことはない。あきらめ顔で、頭から分厚い布団をかぶりゴロゴロしている。子どもたちにとって布団は楽しい遊び場、あのふわふわ感がいいのだ。

湯布院は、全国でも人気のある温泉地。男の子たちを、古びた温泉に連れて行った。温泉に手をつけて「熱い！」と言った。その温泉を管理している人は、予め水を入れてくれたという。私も熱いとは思わなかった。取りあえず脱衣場で服を脱ぎ、私が裸になって温泉につかった。初めての温泉体験。パンツが脱げない。タオル一枚でうまく隠すのだと教えるが、その勇気がない。パンツのままで入りたいというが、それは「日本流ではない」と促す。

最初に身を沈めたのはジエックだ。私は風呂の中から誘うが、英語が全くダメな私には、辛抱強く待つしかない。ジエックはタオルを湯船の外に置いて「ジャパニーズスタイル！」と、誇ら

しげに声を挙げた。私には冷たいと感じるほどに水を注ぎ込み、全員が温泉体験をクリア。途中で一人お客が来たが、あまりの賑やかさに驚いて帰ってしまった。後に来た20代の男性は、英語で話しかけながら、一緒に風呂につかった。旅人らしい、軽やかな英語でフィリップスのことを聞いていた。子ともたちは、それでまた少しリラックステイクしようだ。

時にはうるさい！止めて、と言われたピアノ弾きは「ドドン」だ。最初はたどたどしく旋律を探り引きしていた彼のピアノは、2週間後にはジャズっぽくなってきた。ギターを弾いているので和音の取り方が上手い。上手にピアノが弾けるようになると、歌も一緒にいついてくる。鍵盤から目を離しても大丈夫なほど、急成長したピアノ弾きはリクエストを取るようになり、大台唱も…。

期間中で最大のお土産を手にしたのも彼だと思う。ビッケネームのアンブレ付きエレキギターを、中津の細川慈照さんからもらい受けて帰ってきた。後で聞いた話であるが「少しだけセツションしてみても、天童と呼べる音感を感じているなと思った。プロのギタリストになって帰ってきて欲しい」という思いだったと。30年ほど前に彼が

始めて手にしたギターらしい、慈照さんらしいプレゼントだ。

改めて『ミンダナオの風』(56号)を見ると、ひとり一人の動きを思い出す。いつも低い椅子に陣取っていたクラウディン。チョットボスっぽい目つきでみんなの遊びを眺めていた。休んでいるときの姿だ。サイリルの笛はもう少し聴きたかった。音色は日本のお祭りなどで使われる横笛に似ている。指の使い方一つで、自由自在に音を作る。高度の技術がなければそうはいかない。最初にお風呂に浸かったジエックは、手際よく荷物の積み下ろしなどを手伝う、気の利くお兄ちゃんだな。ジョバリン・モノルハイヤもやたら明るく、何時もはしゃいでいる。パレン



ティンとマリサは自立たない子だと思っ。歌ったり踊ったりすると、とてもいい顔になる。もう少し近づいてお話をしたかった。ノルハイヤは「ポテ(白)」というニックネームが似合う子だ。これまで出会ってきたイスラムの子たちのように、どこかでこっそりお祈りをしていたのかも知れない。宗教とは無関係に育つ多くの日本の子どもたち、それが自由なのか、幸せなのかを考えさせられる。少なくとも私が出会ったイスラムの子たちは、みんな可愛く素敵な子たちだ。参加した子どもたちが、私はカトリックだ、プロテスタントだと言え社会にすることを羨ましく思う。

「ティニクリン」という踊りは、私も小学生の頃学校で教わった。「ティニクリン」と歌いながら踊ったのを覚えている。5才ほど年上の女性も「私も踊ったことがある」と、懐かしそうにその時のことを話してくれた。60年以上前から、フィリピンと日本の子どもは繋がっていたのだと…。学び、思い起こさねばならないのはミンダナオの子どもたちの笑顔と伸びやかさ。日本の子どもにも無いのではない。日常の何かが間違っているために、はじける瞬間を失っているのだと、私はそう思う。

9 **ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭の子、親がいても学校にいけない子を採用基準とし、大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み、生活を保障。学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、寮下宿代、生活費等が入っています。**

## わたしの少女時代の 思い出から (9)

松居 エープリリン

開校記念日のイベントの日、バレーボールの試合が始まり、最初に、わたしたちとは別のチームの試合からはじまた。わたしは、彼らがどのようにプレイをするのかを見た。とってもじょうずに、バレーボールをしている。とりわけ、どうやって相手にむかってアタックするかを、わたしは、注意深く観察した。強烈にアタックされて、相手のボールをブロックできず、ボールがコートに落ちたときには、思わずさげんだ。そして、彼らの弱点が、どこにあるのかも観察した。

日ざしは強く、暑かった。でも、みんな楽しく昂奮して、すべてのイベントに挑戦していた。先生や親や親戚、学生たちや友人たちも、日傘をさして観戦している。日傘が無い人も、タオルを頭にまいて、直射日光をさけていた。でも、選手たちは、お日さまのことなどおかまひなく、試合をつづけた。ひたすら勝つことだけを考えて。「エープリリン！」担任の先生が、わたしを呼んだ。

「はい、先生！」ほほえみながら、わ



たしは、こたえた。

「服を着がえてきてね。あなたは、次の試合に、出るんだから。」先生がいった。

「アーン！先生、ごめんなさい。体操着、持ってないんです。バレーボールできるなんて、夢にも思わなかったから。」そう、わたしが答えると、先生はほほえんでいった。

「わかったわ。だいじょうぶ、心配しないで。わたしが、見つけてきてあげるから。」

わたしは、自分の体操着なんか持っていないかった。友だちやクラスメイトといっしょに、外で遊ぶ時間なんか無かったから。いつも、家のお仕事をし

たり、畑で働かなくっちゃいけなかつたから。先生が、開校記念日にお祝いをすることを発表したときも、そこで

行うイベントについて説明されたときにも、わたしにはスポーツ大会や学芸

会のことは、どうでも良かった。なぜって、たとえやり方を知っていても、わたしは、見に行く事も参加することも

いままで出来なかったから。そんな時間、わたしにはなかった。

「エープリリン。体操着を持ってきたから着てごらんさい。そして、ア

ナウンスがあるまで待っているのよ。」と、先生がいった。

「ありがとう。先生！」わたしは、答えたと、わたしは、お手洗いに走って行くと、体操着を着た。Tシャツは、ピッタリと体にフィットした。短パンは、ちよつと小さかった。ひざから下が見え見え

だったし、はきごこちも良くなかった。でも、はく以外には、どうしようもない。

わたしは、ほかのバレーボールをする子たちよりも背が低かった。でも、早く走れたし、動きも素早かった。集中力もあったし、自分のやるべき事は、全力をそそぐ性格だった。

「ピリリッ…ピリリッ…ピリリッ！」向こうで笛が鳴る音が聞こえた。そし

て、勝ち組の子たちが、歓声を上げる声

が聞こえた。第一試合が終わったのだ。最初の試合に勝ったチームの名前

が発表されたときに、ふたたび歓声があがった。

わたしは、競技場所にもどると、バレーボールコートのそばにかけてい

た。次の試合がはじまる合図があり、一人ひとりの名前がよばれて、コート

のなかに入っていた。

わたしの名が呼ばれたときは、緊張して胸がドキドキした。ひざも、ガクガクふるえて、暑い日なのに手が冷た

くなった。

わたしは、脇にいる選手のまえをよこぎって、コート

のまん中に進んでいくとき、一人の少女が、わたしを見て笑っていった。

「エッ？何であんな小さな子が、バレーボールにでるの？」

「ボールを受けとめられたら、それでも、いいんじゃない」と、別の少女が、笑顔でいった。

どんな侮辱を聞いても、勝つことしか考えていなかった

ので、わたしは、ぜんぜん気にしなかった。

「ピリリッ…ピリリッ…ピリリッ！」試合開始の笛が、ふたたび鳴った。

コートを取り囲んでいる人たちが、歓声

が上がるのが聞こえた。



わたしは、選手のなかで一番小さかったから、ボールを受けとる役。ゲームは、スムーズにすすみ、両方が、順調に得点をあげていった。時には相手方が、2点リードしたけれど、わたしたちは直ぐに追いついた。わたしたちの得点が、相手を超えると、相手もすぐに盛りかえした。そして、相手側がタイムアウトをとったので、わたしたちもコーチのもとに走りよって、うまく攻撃するための相手の弱点を話しあった。

ふたたび笛の音が聞こえたので、コートにもどり、ゲームが再開された。わたしたちは、どこかの弱点を突くかをサインしあった。そしたら、わたしたちは、5点も相手方からとった。それからあとは、相手も挽回することができなかった。さあ、あと一点だ。

でも、受けとめたボールがはじけ飛んで、ボールは、コートから横に飛びだしていった。わたしは、全力で走って追いかけて、強く打ち返した。まわり

で叫び声があがった。しかし、必死に走ったために呼吸がみだれ、わたしは、それを見る元気も無かった。うつむいたまま、両手でひざをかかえてしゃがみこんだ。

とつぜん、だれかがわたしの背中をたたいていった。

「だいじょうぶかい？」

わたしは、うなづいた。

「君たちのチームの勝ちだよ」と、コーチは言った。

「よかった！」わたしは、微笑みながらゆっくりと立ちあがると、息が少しづつ整ってきた。

コーチも、おおきな笑みを浮かべた。

「それにしても、ほんとうに、だいじょうぶかい？」彼は、もう一度わたしにたずねた。

「ええ。コーチ。ほんとうに、だいじょうぶ。」わたしは、しっかりと答えた。

「よっしゃ！」彼は言った。

チームの仲間たちは、わたしに手をふってきけんだ。

「わたしたちの勝ちよ！」そして、飛び上がった。

「さあ、みんなのところにお行き。」と、コーチは言った。

わたしは、仲間のほうに行くと、おたがいにだきあって喜びあった。

## ミンダナオ子ども図書館のサイトに「MCL文庫」と「映像サイト」を立ち上げました！ 検索「ミンダナオ子ども図書館だより」

日本に滞在しはじめて、最初に驚いたのが引きこもりと不登校、そして青少年の自殺率の高さでした。また次第に見えてきたのが、現職のビジネスマンを含む中高年の方々、取りわけ、退職後の高齢者の方々の孤独でした。そうした方々から、しばしば耳にするのが、ミンダナオ子ども図書館のサイトが、大きな慰めになっている、という言葉でした。

特に、引きこもりの青少年の子どもたちや、貧困家庭で親がいないで、一人で家にいる青少年たち、また、高齢化した社会のなかで、孤独で、時には本を買うお金も無く、外にも出られない高齢者の方々が、サイトの子どもの写真を見たり書かれている文を読まれたりして、落ちこんだ心が慰められる事もわかってきました。

生活に疲れ果てながらも、携帯しかもって歩けない、ビジネスマンやサラリーマンの方々、深夜まで働かざるを得ない、外国籍の過剰労働の方々からも、ミンダナオ子ども図書館のサイトやFacebookが、落ちこんだ気持ちを癒やし救ってくれる、と言う話も、しばしば聞きます。

そこで、考え続けた末に、孤独な世界から飛びだしてもらえればと、本になる前の原稿を、サイトに掲載して皆さんがたに無償で読んでいただき、ミンダナオの子どもたちが持っている明るく暖かく、貧困でも愛と友情と生きる力に満ちた、「ミンダナオの風」をお届けして、することにしました。

**絵本や本は、いつも側にいてくれます。読んでくださいね。**



今人社



今人社



彩流社

# Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない  
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも  
はるかに美しいと感じるときだってある。  
けれども、どうにもならないのが、たべられないときと、  
お金が無くて学校に行けないとき、病気になるっても治せないとき・・・



## ミンダナオ子ども図書館支援方法

1、**医療や読み聞かせ等の活動全般にかかる経費と子供たちの生活費を支援**・・・自由寄付  
直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった方には隔月に機関誌『ミンダナオの風』と  
年一回絵本をお届けします。

自由寄付は、一番根幹になる寄付です。貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの  
医療費。まだ支援者が見つからないにも関わらず放っておけず採用している140名ほどの奨  
学生達の学費。保護を必要として、MCL本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている200  
名ほどの奨学生の生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々に充てています。

2、**植林環境支援**・・・6万円(ゴム、カカオの木600本、1ヘクタール、現地作業代)  
洪水対策と先住民が土地を手放さないようにするための、経済自立支援です。

3、**保育所建設支援**・・・90万円(簡易保育所は止め、スタンダードにしました)

総コンクリート製をご希望の方は、130万円で可能です。

開所式の参加や訪問も可能です。毎年チェックし、必要な場合は修理をしています。

### スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭や崩壊家庭の  
子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。その中の  
特に何らかの事情で保護を必要としている子は、本部や下宿小屋に住み生活を保障(現在  
200名)。支援には制服、学用品、小遣い、下宿代、医療生活費等が入っています。

1、**大学生スカラシップ支援**・・・年額70000円(月額5833円)

2、**高校生スカラシップ支援(日本の中高生)**・・・年額60000円(月額5000円)

3、**里子支援(小学生)**・・・年額40000円(月額3333円)

スカラシップの場合は、振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校」「里子」と書いて振り込  
んでいただければ、現地スタッフの宮木梓よりお便りします。その後、機関誌に同封して高校・大  
生の場合は本人からの手紙(英語)、6月にスナップ写真、8月に成績表、12月にはカードが届き  
ます。小学生の里子の場合は、年一回の絵手紙です。プレゼントや文通も可能です。

事前の紹介や希望、訪問などのご相談は、メールで現地スタッフの宮木梓(あずさ)さんか、FAX  
で日本事務局の前田容子さんに!訪問の際は、ダバオ空港にお迎えに行き、MCLに宿泊していただき、  
奨学生の自宅にもご案内します。宿泊費はとりません。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、  
**メール [mclmindanao@gmail.com](mailto:mclmindanao@gmail.com) 現地日本人スタッフ: 宮木梓(あずさ)**  
**FAX: 0743 74 6465 日本事務局 前田容子**

詳しくはウェブサイト参照「検索: ミンダナオ子ども図書館だより」

<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>

**サイトから、Paypal を使った、ネットバンキングも可能になりました。**

### 郵便局からの振り込み

**ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057: 加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』**  
(他の銀行からの振り込みは)

■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900

■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 〇一九店(ゼロイチキユウ店) ■口座番号 0018057

講演会、報告会、家庭集會に、松居友が講演料、謝礼に関係なくうかがいます。

サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。

メールや電話でもお申し込みください。講演を企画してくださるのも、大きな支援です。 12

メール: [mcltomo@gmail.com](mailto:mcltomo@gmail.com) 携帯: 080-4423-2998 (日本および現地転送・松居友)